

詩人の態度

——高村光太郎の戦争詩に即して——

和田正美*

1

昭和十六年十二月から二十年八月までの大東亞戦争の期間に、準戦時下ともいふべき二十年十二月までの數箇月を加へた約四年の間に、高村光太郎が作つた詩は高村の全集に據る限り百四十篇といふ數に達してゐる。これらの詩を讀んで最先に思ひ浮ぶのは、ここで謳はれた思想と情操は何處へ行つたのだらうといふ感想である。それが一旦世に容れられながら最終的には顧みられなくなつたばかりか、それを謳つた當人によつてすら捨てられたとすれば、そのことは言葉の深い意味における悲劇と言はなければならぬであらう。

以上の詩を通して高村光太郎は大東亞戦争における日本の大義を奉ずる熱烈な愛國詩人として振舞つてゐる。高村が大東亞開戦を知つた際の、

十六年十二月九日付の詩の全文を早速引用することにしよう。尙、今號の研究紀要には執筆者が大層多いと聞いたので、紙數をあまり費やしたくないと考へ、不體裁を承知の上で、改行は斜線／で示すことにした。

記憶せよ、十二月八日。／この日世界の歴史あらたまる。／アングロ・サクソンの主權、／この日東亞の陸と海とに否定さる。／否定するものは彼等のジャパン、／眇たる東海の國にして／また神の國たる日本なり。／それを治しめしたまふ明津御神なり。／世界の富を壟斷するもの、／強豪米英一族の力、／われらの國に於て否定さる。／われらの否定は義による。／東亞を東亞にかへせといふのみ。／彼等の搾取に隣邦ごとく瘦せたり。／われらまさに其の爪牙を摧かんとす。／われら自ら力を養ひてひとたび起つ、／老若男女みな兵なり。／大敵非をさとるに至るまでわれらは戦ふ。／世界の歴史を兩斷する／十二月八日を記憶せよ。

この詩には高村光太郎のすべての戦争詩が集約されてゐる。高村は戦争の終結に至るまで、この詩に示された基本線から一步も外れることがなかつた。戦時下における彼の詩はことごとくこの詩のヴァリエーションなのである。

世界の富を壟斷する米英の力を否定し、東亞の義において起つことの出来る日本人はよほど優秀な民族でなければならぬが、高村はそのことを十九年二月二十二日の詩の中で次のやうに言つてゐる。

日本の美世界をきよめ、／日本の道世界を救ふにあらざれば／世界とこしへに我利の巷たらん。／われら恥を知り、われら自らつつし

む。／餓ゑて悲鳴をあげず、傷きて莞爾たり。／われら神州清潔の民、／品性の美に護られて今醜虜と戦ふ。

このやうにして説かれた選民思想には問題なきにしもあらずだらうが、さういふ話は別の機会に譲つて、今はただ、詩人の深く信ずるところのある章句をそのまま受取つておくことにしたい。高村にとつて日本の品性の美は世界に冠たるものであり、彼は同じ詩の中で、「狂躁飽くなき世界の上に／品性かくの如きものあるを／神今にして示さんとす」とも述べてゐる。

戦局の悪化に伴つて緒戦の勝利が夢物語になりつつあつた戦争末期の様相が高村の詩に影を落したことはいふまでもないが、彼はアメリカ軍による本土爆撃のさなかにあつてさへ、勝利への希望を捨ててはゐない。そのことを端的に示す二十年六月二十五日の詩の³⁾一節を引用しておく。

彼らが蹂躪せりとなすもの／實は多くわれらが餘贅^{よぜいじょういづ}剩^{せう}疣^うの類にして
／われら民族の實體は卻てその皮下にあり、／われらが祖神むしろ
彼らの手をかりて／われらが汚毒を焼却し給ふならざらんや。／日
本國土あまねく灰燼に歸し／行政の機構ことごとく停頓するが如き
時、／われら民族の自性勃々として焦土にめざめ、／われらが祖先
の息吹薰風の如く全土に満ちん。

高村はこの詩を、「來るものよ、徹底して來れ。われら亦神性に徹底して悉く之を破らん」と結ぶのである。

ここまで言はれると高村光太郎の詩の愛讀者の中にも、「それは違ふだらう」と感じる人があつたのではないかと想像されるが、だからと言

つてこの詩を精神異常に冒された誇大妄想の産物としてしりぞけることは出来ない。詩人は正氣である。

しかしかうは言へるであらう。自國民の災厄を天譴と見做すことは何やらユダヤ・キリスト教的である、と。このやうに敵の武器であるべきものを味方の武器として活用しなければならなかつたことの中に大東亞戦争の悲しい性格の一端が窺はれるやうな氣がしてならない。

2

戦時下における詩人の態度といふものを考察の対象にすると、それは決して一様ではなく、たとへば高村光太郎とは正反對の厭戰的、反戰的傾向を持つ詩人が發表する當てのない詩を憂悶の中から書き繼ぐこともあるだらう。そのことはもとより認められなければならない。詩人が時代の子であることは、それにかかはるやり方の自由を認めた上で言へることである。

しかしこの問題では祖國の戦争に全面的に協力することこそ詩人の本道であらうと思はれる。諸外國の實例に徴しても、それは明らかなことである。まして日本は肇國以來の總力戰をたたかひつつあつた。詩人がその中で一つの役割を引受けようとすることは當然であらう。高村にしろ、他の誰にしろ、戦争に協力したことそれ自體で咎められなければならない謂れはまつたかない。自分達の態度に同調しない同僚文學者を壓迫することさへしなればよいのである。

とはいへ詩の自律性よりして、戦争に協力するその姿勢が問題視されることはあつても、それは仕方がないと思ふ。高村におけるこのことについては後述することにした。

高村光太郎はその殉國的熱情の赴くところ、國民同胞に多大の期待を寄せてゐる。彼にして見れば老いも若きも、男も女も、要するに日本人は一人残らず、聖戰貫徹の同志であり、仲間なのであつた。

高村によつて謳ひ上げられた日本人はこの通り戦争の現實に直結してゐるが、とは言ひ條、そこから一步退いた場所で讀むことの出来る詩句がことさら美しく感じられることは興味深い。特に日本の女の清らかさを讚美し、賞揚した詩の数々には注目させられる。その種の詩のそれぞれ一節を次に列擧することにしよう。

死はかろく義はおもく、／古來東方の女性ことごとく美し。／その美驕らず出しやばらず、内に湛へて堅忍の力あり、／男子みなその力に支へらる。(十六年十二月十九日)⁽⁴⁾

女性はみんな母である。／子あるは言はずとしたこと、／不幸、子なきもまた母だ。／母の神祕は深さ知られず、／母の愛撫は天地に滿つ。(中略)されば、われらの女性國土にあまねく、／世にもあたたかき母のかをりを放つ。(十七年十月二十一日)⁽⁵⁾

女性に宿る母の不思議は／此世にそそぐ醍醐甘露の天のしたたり。(中略)私のやうな老年さへ／少女を見ても母を感じる。／母性に觸れぬ渴きから／人はねぢけて虚妄の徒とも敢てなる。(十九年三月二十九日)⁽⁶⁾

これらの詩句は日本の男にとつて日本の女が何であるかを物語つてゐるとしか言ひやうがない。その意味で高村はここに日本の男の極限的な

姿を見せてゐるのだと言へるかも知れない。戦ひに敗れた後、文化の不思議なねぢれ現象によつて、それが忘れられただけのことである。

老若男女を問はず國民はすべて戦士であるといふ高村光太郎の姿勢よりすれば次のことは異とするに當らないが、彼は或る詩の中で、子供が大人に變るのではなく、子供のまま機能が出揃つて大人になるのだと述べた後、それを左の如くに續けてゐる。

子ども子どもといつて／別物にするのは止ませう。(中略)大人の毎日の實生活こそ／子どもの本能を導きます。／毎日の實生活こそ／その家その國の傳統の在りかです。／父母の行ひと精神とが／いつのまにか子どもの本能を左右します。(十七年三月二十五日)⁽⁷⁾

この詩の中には、「大東亞の安危をひきうけた日本」といふ語句がある以上、これまた戦争詩と見做すべきであるが、さうは言つてもこの詩は、日本の女の美と力を讚へた詩と同じく、戦争の現實から離れて鑑賞することが可能である。以上に引用した箇所などは、自ら幼児化することによつて子供の大人への移行を妨げてゐる現代の親達にじっくり讀ませてやりたいほどである。高村の理想主義は女と子供の處遇において一つの普遍の域に達したといへよう。

そして戦死者のことがある。およそ詩人たるものはその立場の如何にかかはらず、戦死者には禮儀をつくすべきであらう。戦争が行はれるのはそれを通して國家が生き延びるためであるとすれば、戦死といふ個別的な死は全體の生を維持するために拂はれた犠牲と見做すことが出来るからである。

高村光太郎はアツツ島守備隊の全員玉碎を知つた時、それを次のやう

に謳つた。⁽⁸⁾

もとより武士のあはれを知らぬ彼等の眼には／ただ日本軍全滅すとのみ映じたのだ。／皇軍二千餘人悉く北洋の孤島に戦死す。／この悲愴の事實に直面して／その神の如き武人の心にわれらは哭く。／われらは哭く、われらは哭く。／日本全國民、眼を閉ぢて哭く。(中略) われら同胞ここに至つては、語るに堪へない。ただ首をたれて黙するばかりだ。(十八年六月一日)

アツツ島の悲劇が起つたのは十八年五月二十九日のことであり、現に高村はこの詩を「五月二十九日の事」と題してゐる。

3

ここから先は高村光太郎の戦争詩以外の詩も引用することにした。彼は明治四十三年、二十八歳の頃、次の詩を制作した。以下はその全文である。

頬骨が出て、唇が厚くて、眼が三角で、名人三五郎の彫つた根付の様な顔をして／魂をぬかれた様にぼかんとして／自分を知らない、こせこせした／命のやすい／見榮坊な／小さく固まつて、納まり返つた／猿の様な、狐の様な／ももんがあの様な、だぼはぜの様な、^{めだか} 鯉の様な、鬼瓦の様な、茶碗のかけらの様な日本人(明治四十三年十二月十六日)

私はこの詩を高村光太郎の全詩だけでなく、近代日本の全詩の中でも最悪の詩だと考へてゐる。もしこんなものを「詩」と稱さなければならぬのなら、といふ前提の上に立つてさう考へるのである。

それはともかく明治の末年に高村は日本否定、日本嫌悪をその特色の一つとする詩人として出發した。この心性は何か肯定し、讚仰するものがないと成り立たないが、高村においてそれは西洋であり、特にフランスのパリだつた。彼は明治三十九年から四十二年までアメリカを経てイギリスとフランスで青年期を過したのである。

パリの都が高村の精神に及ぼした影響は相當のものであつたらしく、右の詩より十一年後に彼はノートルダム大聖堂に呼び掛ける次の詩を作つた。⁽¹⁰⁾

おう又吹きつゝのるあめかぜ。／外套の襟を立てて横しぶきのこの雨にぬれながら、／あなたを見上げてゐるのはわたくしです。／毎日一度はきつとここへ来るわたくしです。あの日本人です。(中略) 今此處で、／あなたの角石に両手をあてて熱い頬を／あなたのはだにびつたり寄せかけてゐる者をぶしつけとお思ひ下さいますな、／酔へる者なるわたくしです。／あの日本人です。(大正十年十一月以前)

右に引用したのはこの長い詩の初めの一節と終りの一節であるが、次の詩句をこれに付け加へておくことにしよう。

ノオトルダム ド パリのカテドラル、／あなたを見上げたいばかりにぬれて來ました、／あなたにさはりたいたばかりに、あなたの石

のはだに人しれず接吻したいばかりに。(同右)

ここには何がしかの誇張があるのかも知れない。無機物のカテドラルに對面した際の印象を後年想ひ起すに際して、それを現身の女の肌になぞらへることは幾ら何でも出来過ぎだと思ふ人がゐても不思議ではない。その點、これは第一級の詩とは言ひ難い。しかし詩人が誇張の危険を冒してさへ、パリとそれを象徴する大聖堂をこのやうに讚美した眞率さは認めなければならぬであらう。

そして高村は大東亞戰後の昭和二十二年に自らのパリ時代を回想し、パリの美點を列擧した後、かう記した⁽¹¹⁾。

フランスがフランスを超えて存在する／この底無しの世界の都の一隅にゐて、／私は時に國籍を忘れた。／故郷は遠く小さくけちくさく、／うるさい田舎のやうだつた。(中略) 悲しい思ひ是非もなく、／比べやうもない落差を感じた。／日本の事物國柄の一切を／なつかしみながら否定した。(昭和二十二年六月十五日清書)

さうすると歸國した後の高村光太郎は周囲の社會に異邦人の感覺で接しながら、しかも彼とは相容れない日本の言葉である日本語での詩作にその生命を託したわけで、そこには精神の並々ならぬ緊張があつたものと想像される。そのことはもとより評價出来るが、問題は何故、青年時代の日本否定と西洋心酔が戰爭の時期に至つて日本心酔と西洋否定に入替つたのかといふことである。

青年時代の高村がその熱い思ひを捧げた相手はもつぱらフランスであつて、大東亞戰爭の主敵たる英米ではなかつたといふ主張には説得力が

ないと思ふ。高村が若い頃、その土を踏んだイギリスとアメリカを嫌つた形跡はないし、彼の戰爭詩の中に、フランスへの思慕が依然として續いてゐることを偲ばせる詩は一篇たりとも含まれてゐない。それどころか歸國後の高村はバーナード・リーチに寄せる形でアングロサクソン民族を讚美してさへゐる。それは次の如くである⁽¹²⁾。

私の敬愛するアングロサクソンの血族なる友よ／シエクスピアを生み、ブレエクを生み／ニュウトンを生み、ダアキンを生み／タアナアを生み、ピアズレエを生み／そして又、オオガスタス・ジョンを生んだ血族から生れた友よ(大正二年十二月五日)

ここには、「世界の制覇者アングロ・サクソンの理念は／未だ己^{おの}が地下磐石の崩れんとするを信ぜず、／ひたすら財を傾けて消耗の戰に勝たんとする」(十七年十二月二日)の三行⁽¹³⁾に見られるアングロサクソンへの蔑みはない。

高村の變貌は一見不可解であるかの如くである。しかしよく考へると、いや、ことさらよく考へなくても、それが決して不可解でないことは私達に感知されずにはゐない。同族嫌悪が同族へのべつたりの愛着と裏表の關係にあることをことごとしく指摘する必要があるだらうか。とすれば嫌悪が愛着に變つた時、嫌悪と共にあつた崇拜が侮蔑に變ることは理の當然である。

高村の相反する二つの態度の間に本質的な隔たりはなかつたと言つてよいだらう。

大東亞戦争の中を生きる高村光太郎が聖戦貫徹の志を抱き続ける詩人であつたことそれ自體は私見によれば少しも咎めらるべきことではない。近代戦はその性格よりして銃後の民にさへ何等かの役割をあてがふものであり——この小論の2の中でもそれに近いことを述べたが——高村は戦争に全面的に協力する詩人の立場から國民を教導する役割を引受けたのだつた。かういふ問題で現實の様相が一變した後、すなはち戦争が決定的に過ぎ去つた後、詩人の協力的姿勢を罵倒することは、人間における生の動機を無視した卑しいやり方といふものである。

ここで詩と時局の關係について一考することにした。時局に應ずる詩はあり得るし、現に高村の戦争詩はそれであるのだが、時局に即した詩といへども、それは何處かで時局を超えてゐなければならぬだらうと思はれる。言換へれば詩は、時局が古びても、さうたやすく古びてはならない筈である。

もつともこの觀點から高村を批判することは彼がそれに恵まれなかつた安全地帯からの發言といふ譏りを免れないかも知れない。この小論を書きつつある私は戦争の現實に直面してはゐない。問題はまことに微妙である。

ここにこのやうな詩がある。⁽¹⁴⁾

ひたすら輪奐の美を誇る文化は低い。／世界最大をよるこぶ文化は幼い。／チュウリップ、カンナの炎の前に／一莖の白い茶の花が嚴として持つ／この高さを人類は知るがいい。／リグレイを噛んで人

を憚らぬ／あの無作法を人類は恥ぢるがいい。(十七年十二月二十六日)

日本がよくそれを代表する東洋の文化にくらべれば、西洋の文化は低くて幼いといふわけである。この詩は、「むしろ毛もくぢやらな彼等を救ふのが／神々の示したまふわれらの道だ」の二行で終つてゐる。近代戦には文化を賭けた戦といふ側面があるから、言論の中で、相手の國または國々の文化を貶しめることが悪いとは言へない。第三者の眼から見れば雙方の文化にそれぞれ長所と短所があるとしても、戦争の當事者としては、敵國の文化にもいいところがあるなどとは言へないであらう。ここまでは何とか認められるとしても、次の詩に至ると、それをすんなりとは認めたくない氣持が私の中に湧き起る。

君等の音楽は聲をかぎりに絶叫し、／山羊の鳴くやうな喇叭を吹く。／君等の美術は官能の刺戟とめどもなく、／あるひは紳士淑女の俗氣を放つ。(十九年四月十六日)

西洋の音楽も美術も駄目だといふのであるが、青年時代の高村光太郎は彫刻を中心とする西洋の美術によつて自己形成を成し遂げた人であり、さうすると右のやうな詩句は過去の自分を裏切るものと言へはしないだらうか。そればかりではない。高村の戦争詩の讀者の中には、彼と同じく戦争の大義を奉じ、不埒な夷狄の撃退を心より願ひながら、しかも西洋の音楽や美術を愛好してゐる人々が必ずやゐるだらうと思はれる。とすればこれらの詩句はさういふ讀者への裏切りでもあるのではないだらうか。

それならどう書けばよかつたのだと言はれても、うまく答へることは出来ない。言論界の戦争指導者が敵を褒めるわけに行かないことはすでに述べた通りである。しかし時局に即應した詩であつても、詩は詩としての性格を備へてゐなければならぬ筈である。その詩の作者が自他との關係を毀損しないやうに努めることはその一つであると言へるのではあるまいか。

高村の戦争詩は時として當時の國策をなぞり過ぎてゐるやうに見える。詩人が國策に従つていけないなどと言ひたいのでは毛頭ない。國策に従ひながら、尙、その向う側に望み見る何かがあつて然るべきだらうといふ意味である。

さて次の詩はどうか。

神よさしたまふ戦は／われらの生活を一新する。／もう貧富の分ちもわれらに無い。／私慾のあがきは恥となつた。／この世の禍のいちばんの土臺石、／頑とした利己の影もうすくなつた。(十七年十月二十二日)

どんな大戦争に参加する國民も自分の生活を捨ててそれをするとは出来ない。生活を守らうとする私心が一方になれば、戦争といふ公けに奉仕することはおぼつかないであらう。「貧富の分ち」とか「私慾のあがき」とか「頑とした利己」とか言へば、それは言葉の調子からして「この世の禍」の源に違ひないが、これらの否定的なものを逆用し、止揚する方途を見つけないければ大いなる建設は望めないといふものである。國民よかくあれかしとする國策からはみ出るものがこの詩にはない。それが崩れ去ることの危ぶまれる一元論だけがあるやうに見える。

詩人の態度 和田正美

そして神話的發想の問題がある。高村光太郎の戦争詩は終始それに支へられてをり、引用を一つにとどめなければならぬことには辛さを感じずにはゐられない。

われらが國土おのづから海上に浮び、／四邊の波遠くこの神苑をまもる。／うかがふもの近づきがたく、／神明の氣山川をこめて／水清く砂白く松あをき別箇の天地、／古來等格を絶せり。／豐葦原瑞穂國と／遠つ御祖の宣らしたまひし／常若にして彌榮の國、／青人草しげりやまず、／悠久の古へを今に生き、／畏みて現人神におはします／すめらみことに仕うまつる。(十九年十月七日)

これは戦後になつて完膚なきほどまでに破壊された發想であり、その破壊作業に雷同してゐないつもりのも私もそれをそのまま受入れる氣にはなれないが、しかしながら、神話と史實は等しく歴史に仕へるといふ見地よりすれば、高村がその詩の前面に神話を押し出したことは不當なことではなかつたらうと思はれる。天皇を現人神と信ずることも全日本人を神々の末裔と見做すこともそれが本氣なら結構である。國策の立案者にとつては、建國神話を持ち出すこと以外には、キリスト教的傳統に依據する英米に對抗する術はなかつたのであらう。

しかし高村のために惜しまれるのは彼がもつぱら神話に頼つて、史實にはほとんど眼を向けようとしなかつたことである。詩の中にもつと史實を鏤めてゐれば、それはふくらみを増しただらうと思はれてならない。高村によつて取上げられた史實は元寇と楠子の功業ぐらゐのものである。見かけに反する脆さを内包した一元論がここにも見て取れるのではないだらうか。

以上、戦争といふ極限状況から遠く離れた呑気な場所よりする批判を試みたが、高村の戦争詩が首尾一貫し、それなりの美しさを湛へてゐることは認めなければならない。そこには格調がある。ところがその格調はやがて詩人自身の手で捨てられてしまふのである。

5

高村光太郎が戦後に發表した戦争関連の詩を読む時、私は失望の念を禁じ得ない。詩人は昨日までの大東亞新秩序建設への夢は何處へやら、日本の戦争をあつさり否定してゐるのである。次の詩は終戦後、四箇月もたない頃に作られた。

欺きしは「兇敵」にあらずして／二なく頼みしわれらが「神軍」なりしなり。／一切は曝露せられて國民愕然たり。(中略)かくの如き國情の蹣跚たるにあたりて／方に民族の本來を開かんとする者は何ぞ。／畏くも 聖上すでに太平を開きたまふ。／國敗れたれども民族の根氣地中に澎湃し、／民族の精神山林に嚴たり。／われら深く昨日の不明を慚ぶと雖も／つひに自棄の陥穽におちず、／民族の智と文と美とを信じて／徐ろに永遠の大道に就かんとすなり。(二)十年十二月六日)

この詩の美點としては天皇に批判の鋒先を向けてゐないこと、そして何よりも日本民族の將來を明るく考へてゐることが擧げられるだらう。しかし「一切は曝露せられて國民愕然たり」、「われら深く昨日の不明を慚ぶ」といふ箇所は、ほんの數箇月前まで「兇敵」の撃滅を自ら

信じ、國民にも信じさせようとしてゐたのと同じ人の筆に成るとは思へないのだ。高村はここで決定的に重要な何かをなくしてゐるとしか言ひやうがない。

勿論、戦に破れて萬事一變した情勢の下で、戦時中のそれと似たやうな傾向の詩が書けるわけではない。詩人であれ、それ以外の誰であれ、生きて行くためには、新しくされた自分の姿を世にさらすよりほかはない。しかし政治家や官僚や目先の動きしか見てゐない知識人はともかくとして、高村のやうな戦時體制に密着した國民的詩人の場合には、もし詩の筆を折ることが出来ないのであれば、せめて過ぎし戦争については再び語らないといふ態度が執れなかつたものかといふ氣がする。

沈黙には沈黙としての效用があると思ふ。戦争末期の詩か終戦後早い時期の詩か正確な制作年月日は不明なのであるが、高村は彼の詩の讀者のことをかう謳つてゐる。⁽¹⁹⁾

死はいつでもそこにあつた。／死の恐怖から私自身を救ふために／「必死の時」を必死になつて私は書いた。／その詩を戦地の同胞がよんだ。／人はそれをよんで死に立ち向つた。／その詩を毎日よみかへすと家郷へ書き送つた／潜航艇の艇長はやがて艇と共に死んだ。

高村の戦争詩に力づけられた讀者は「戦地の同胞」に限らず少なからずゐた筈であるが、彼等の中で戦後に生き残つた人々は激變する世相に戸惑ひつつ、それに適應しようとなつたであらうが、その際、かつての戦争詩人が今や戦争に關しては沈黙を守つてゐると知つたら、そこに詩人の志を感じて、逆説的な意味での生きる糧を得さへしたのではなかつたかと思はれる。ところが詩人は「昨日の不明を慚ぶ」と言ひ出した。

これでは讀者は踏んだり蹴つたりといふものである。

これはつまらない詩なので引用を省くが、高村光太郎は戦争初期の十七年一月十三日に「沈思せよ蔣先生」と題して、蔣介石の抗日思想をたしなめる詩を書いた。そして戦後二年たつてから、それを「反省」する詩を書いた。この長い詩の第一段落と第二段落のそれぞれ一部を引用することにしよう。

わたくしは曾て先生に一詩を獻じた。／眞珠灣の日から程ないころ、
／平和をはやく取りもどす爲には／先生のねばり強い抗日思想が／
巖のやうに道をふさいでゐたからだ。／愚かなわたくしは氣づかなかつた。／先生の抗日思想の源が／日本の侵略そのものにあるといふことに。

天皇の名に於いて／強引に軍が始めた東亞經營の夢は／つひに多くの自他國民の血を犠牲にし、／あらゆる文化をふみにじり、／さうしてまことに當然ながら／國力つきて破れ果てた。／侵略軍はみじめに引揚げ、／國內は人心すさんで倫理を失ひ、／民族の野蠻性を世界の前にさらけ出した。(二十二年九月三十日)

この詩の中には、「わたくしの暗愚は測り知られず」といふ一節があるけれど、私に言はせればかういふ詩を書いて發表することの方がよほど暗愚である。ともかく高村において聖戦は入替つて侵略戦争になつた。蔣介石の國家における日本軍の行動を侵略と思ひたければさう思つてもよい。事柄に多少の譲歩をした上で言ふのだが、それは戦後になつて真相を知つた——正確に言へばそれを知らしめられた——詩人の自由であ

詩人の態度 和田正美

る。しかしそれなら米英に、そしておそらく支那にも、日本への或は直接的な、或は間接的な侵略行動はなかつたであらうか。

高村は疎開先の岩手縣花巻へのアメリカ軍による爆撃の様子を次のやうに傳へてゐる。⁽²¹⁾

其日爆撃と銃撃との數刻は／忽ち血と肉と骨との巷を現じて／岩手花巻の町爲に傾く。／病院の窓ことごとく破れ、／銃丸飛んで病舎を貫く。(二十年九月四日)

これは非戦闘員のあからさまな殺傷といふ點で一の立派な侵略の行爲である。戦争の末期には日本中でこの種の事件が枚擧に遑ないほど數多く惹き起された。その頂點に位するのが二つの都市への原子爆弾の投下である。そのことを無視して日本の侵略の非を唱へることはまつたく理に合はない。

大東亞戦争は思ひ切つて簡略化していへば英米の世界戦略が「近代國家」日本を叩きつぶすことを必要と感じ、それに國際社會の中で浮び上らうとする支那が同調するところに生じたものであつたらう。彼等にとつてはさうすることが生存の絶對的な條件であつたといふのなら、それはそれで仕方がないと言へる。しかしかういふことが言へるのは英米とも支那中國とも一應の友好關係を保つてゐる今日においてのことであり、交戦中にはたとひその考が頭の中にあつたとしても、それを公言することが出来るわけではない。戦争指導者としては日本の正義を強調することがすべてだつた筈である。

最も内なる詩を通して戦争といふ最も外なるものに國民を立ち向はせようとする立場の人が、まだ戦火の餘燼がくすぶつてゐる場所で正反對

のことを言ひ出すやうでは、詩の價値はなくなるだらう。これは文筆の徒が戦時中は情報局に統制され、戦後になつてからはアメリカ占領軍の支配下にあつたといふ事情によつて片づけられる問題ではない。

好意的に見れば高村は眞直な人間だつたのであらう。しかし眞直といふことは生活者としては美德であり得ても、詩人としては美德でも何でもないと思ふ。詩人はもつとソフィステイケートされた者であるべきではないのか。

私は高村光太郎の詩人としての資格を根本から疑つてゐる。これが拙文の結びであるが、この小論は私が研究紀要に發表する最終論文であり、最後の言葉として、右に記した感想は高村光太郎と稱せられる一詩人の場合に限られたことではないと付け加へておく。

註

底本は筑摩書房版・高村光太郎全集の第一卷（一九九四年十月二十五日増補版）と第三卷（一九九四年十二月二十日増補版）である。以下に各詩の表題と該當頁を記すことにする。尚、ことわり書きがないものはすべて第三卷からの引用である。

- (1) 十二月八日 四一五頁
- (2) 品性の美 一六三―一六四頁
- (3) 薰風の如く 二四三―二四四頁
- (4) 新しき日に 九―十頁
- (5) 女性はみんな母である 四九―五十頁
- (6) 保育 一七六―一七七頁
- (7) 或る講演會で讀んだ言葉 二九―三二頁
- (8) 五月二十九日の事 九八―百頁
- (9) 根付の國 第一卷・四一頁
- (10) 雨にうたるるカテドラル 第一卷・三〇―三二頁
- (11) パリ 二八七―二八八頁
- (12) よろこびを告ぐ——To B. LEACH 第一卷・二一七―二二〇頁

- (13) 神これを欲したまふ 六一―六二頁
- (14) われらの道 六九―七〇頁
- (15) 米英自ら知らず 一七九―一八〇頁
- (16) 戦にきよめらる 六七―六八頁
- (17) 神州護持 二〇五―二〇七頁
- (18) 永遠の大道 二五七―二五八頁
- (19) わが詩をよみて人死に就けり 三〇九頁
- (20) 蔣先生に懃謝す 三一―三二頁
- (21) 非常の時 二五二―二五四頁